

援助・被援助行動の好循環を規定する要因：援助 成果志向性が果たす機能の検討

その他のタイトル	Factor that affects a Good Cycle of Behaviors Related to Help: A Study of the Orientation to Helping Effects on Helper
著者	妹尾 香織, 木 修
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	42
号	2
ページ	117-130
発行年	2011-02
URL	http://hdl.handle.net/10112/4928

援助・被援助行動の好循環を規定する要因

— 援助成果志向性が果たす機能の検討 —

妹尾香織・高木修

Factor that affects a Good Cycle of Behaviors Related to Help:

A Study of the Orientation to Helping Effects on Helper

Kaori SENOO and Osamu TAKAGI

Abstract

This study investigated the psychological factor that affects a good cycle of behaviors related to help. Questionnaires which obtain the measure of orientation to helping effects on helper were administered to elderly people attending a institute for adult education (N=471, mean age 67.8, SD=5.0). The main results were as follows : (1) Orientation to helping effects on helper could be divided into 2 components: orientation to self-growth and orientation to sharing happiness. (2) A positive relationship was seen between orientation to helping effects on helper and psychological reactions to helping experienced, attitudes about helping-behaviors, experienced helping-behaviors. (3) Orientation to helping effects on helper was correlation with other psychological factors which are considered that affects helping behaviors. These results suggest that orientation to helping effects on helper could be predictor of a good cycle of behaviors related to help.

Key-words: Helping Behavior, Orientation to Helping Effects on Helper, Good Cycle of Behaviors Related to Help (between Help Giving and Receiving) , Factor of Helping Behavior

抄 録

本研究は、援助・被援助行動の好循環を規定する内的要因として援助成果志向性に着目し、まずその測定尺度を構成し、高齢者大学の学生471名に適用した結果に基づいて援助成果志向性の構造とその機能を検討した。その結果、1) 援助成果志向性は、「自己成長志向」と「幸福・安寧感共有志向」の2因子からなること、2) 援助成果志向性と援助後の心理的反応、援助に対する態度および援助行動経験の間に有意な関連性があること、3) 援助行動との関連性が認められている内的要因（情緒的共感性、視点取得、対人態度の積極性、および心理的負債感）と援助成果志向性の間にも有意な関連性があること、が明らかとなり、援助成果志向性が援助・被援助行動の好循環を規定する要因であることが検証された。

キーワード：援助行動、援助成果志向性、援助・被援助行動の好循環、援助の規定因

問 題

援助行動の社会心理学的研究は、なぜ人は人を助けるのかという問いに対して、行動生起を規定する要因が分析されてきた。初期の援助行動研究では、例えば、傍観者効果 (Latané & Darley, 1970) を規定する他者存在などの状況要因が、援助者の内的要因としては、援助状況の解釈や動機づけに影響を及ぼす共感性 (Davis, 1983) や役割取得能力 (Davis, 1983) などが、さらには、被援助者の要因として被援助者の外見や援助要請法などが、援助を促進あるいは抑制する要因として検討されている。しかしながら、援助行動の規定因に関する研究においては、一貫した結果が得られていない (高木, 1998)。

ところで、援助行動は、自己犠牲的な対人行動の一つであるが、条件次第で助けた人自身の幸福感と結びつき、また、将来の援助や被援助行動を促進するなど援助者自身にも肯定的な効果を及ぼすことが明らかとなっている (妹尾・高木, 2003; 2004)。例えば、妹尾・高木 (2003) では、ボランティア活動経験による心理的効果 (援助成果¹⁾) とその影響を、従来の援助研究の多くが一過的な対人場面を実験的に作り出して援助の規定因を検討したのとは異なる方法で検討している。すなわち、人々の日常生活をフィールドとし、居住地域を中心に繰り返しなされるボランティア活動におけるボランティア (援助者) と被援助者の現実の相互作用を、参与観察および面接調査からなるフィールドワークと質問紙調査によって、1) 日常的な援助においても、援助者が援助成果を得ていること、2) 援助の効果認識が大きいほど援助成果は得られること、3) 援助成果が大きいほどその援助成果をもたらした援助をその後も継続して行おうと動機づけられることを、明らかにしている。

また、この援助成果を含む援助行動後の心理的反応は、援助行動を規定するほか、立場をかえて被援助行動にも影響を及ぼすことが明らかとなっている。同一人物における援助行動と援助要請や援助受容などの被援助行動の関連性を検討した高木・妹尾 (2006) によれば、1) ある人が行う援助行動が多様であればあるほど、彼らの被援助行動も多様であること、2) 日々の援助行動が成功的であると認識する人ほど、彼らの援助行動に対する態度と被援助行動に対する態度は一層肯定的であり、3) 援助行動に対する態度が肯定的な人ほど、援助行動や被援助行動に一層積極的に動機づけられており、4) 被援助行動に対する態度が肯定的な人ほど、被援助行動や援助行動に一層積極的に動機づけられていることを明らかにしている。

つまり、援助成果は、援助行動が他者との間で自己強化的に循環する「個人間循環」に

においても、援助者の立場での援助行動と被援助者の立場での被援助行動とが立場を換えて相互規定的に循環する「個人内循環」においても、援助行動を規定する中核的要因であることが示唆されたのである。また、援助成果は、援助者と被援助者の現実の相互作用と、援助者の認知と被援助者についてのメタ認知との相互作用とに規定されることも明らかとなっているが、被援助者への間接的な援助や状況の悪化していく高齢者への援助のように援助の効果認識が難しく援助成果が得られにくいと考えられる援助場面においても、援助成果は認められるなど、援助成果の生起メカニズムについてはさらに究明を要することが多い（妹尾・高木，2003）。

そこで、本研究では、援助成果の得られ方の差異に注目し、援助行動の「個人内循環」と「個人内循環」における好循環を規定する内的要因として、新たに、「援助成果志向性」という概念を導入する。すなわち、援助成果志向性とは、「過去の援助成果に関わる援助経験を中心にして習得した援助成果に対する志向性や態度あるいは価値観」と考える。この援助成果志向性は、自他の援助事象の認知・解釈に影響する個人内基準として機能し、援助授与にいたる状況の解釈や援助授与の理解に影響を及ぼし、ゆえに、援助や被援助の循環を規定すると考える。したがって、援助成果志向性の高い人は、低い人と比べて、援助授与経験の効果を一層積極的に認識するため、援助成果が一層得られ、その後の援助行動の動機づけが高められ、援助行動が引き続き生起しやすくなると予想される。

要するに、本研究は、援助成果志向性を援助行動の好循環を規定する内的要因と位置づけ、援助成果志向性を測定する尺度を構成し、援助成果志向性の構造化とその機能の検討を目的とする。特に、本稿では、援助成果志向性尺度を探索的に構造解明して下位尺度を構成し、それらで測定された援助成果志向性と、援助後の心理的效果、援助や被援助の動機づけ、および援助や被援助経験との関連性を分析し、援助成果志向性の導入の妥当性を検討する。

具体的には、援助成果志向性が、内的要因として、援助行動の好循環を規定すると考え、以下の予測を立て、その検証を試みる。

予測①：援助成果志向性の高い人ほど、他者援助を通じてポジティブな方向での心理的效果を得やすいだろう。

予測②：援助成果志向性の高い人ほど、他者援助を通じてネガティブな方向での心理的效果を得にくいだろう。

予測①、②に基づき、

予測③：援助成果志向性の高い人ほど、援助行動や被援助行動によって、それらの行動が

積極的に動機づけられるだろう。

予測④：援助成果志向性の高い人ほど、援助行動や被援助行動を多様に展開しているだろう。

さらに、援助行動と関連があるとされてきた内的要因の観点から、以下の予測の検証も試みる。

予測⑤：援助成果志向性の高い人ほど、視点取得が高いだろう。

予測⑥：援助成果志向性の高い人ほど、情緒的共感性が高いだろう。

共感性は、援助行動と関連する内的要因である。共感性には、他者の気持ちを汲み取り、他者と同様の情動を体験するという性質がある。すなわち、他者の視点に立ってその気持ちや感情、行動を理解する認知的側面（視点取得）と、他者の情動状態を知覚して、自分も同様の情動を経験する情動的側面（情緒的共感性）とがある（Davis, 1983）。援助成果は、他者の喜びを自分の喜びとして感じることもある。したがって、他者の立場に立って考える視点取得の高い人や他者の情動に関心を寄せる情緒的共感性の高い人は、援助成果志向性が高いと予想される。

予測⑦：援助成果志向性の高い人ほど、対人態度が積極的であるだろう。

高木・妹尾（2002）では、人と関わりを持つことへの関心の高さや積極さといった対人態度の積極性が、援助や被援助の好循環に正の影響を及ぼすことが示唆された。援助成果は、他者に恩恵をもたらす行動を通じて援助者自身が得るポジティブな感情的、認知的結果であり、他者との友好的、積極的な関わりは、援助成果の前提条件といえる。したがって、対人態度が積極的な人は、援助成果を大きく得ることが予想される。

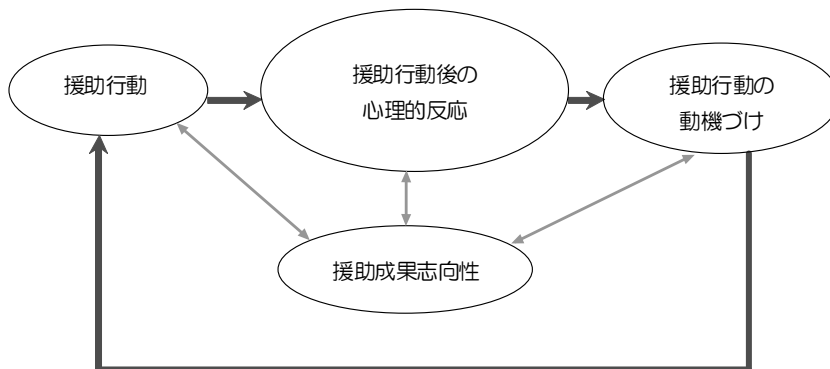


Figure 1 本研究の概念モデル

予測⑧：援助成果志向性の高い人ほど、心理的負債感が低いだらう。

心理的負債感とは、他者から恩恵を受けた時にそれに返済する義務があると感じ、そうする程度のことである（相川・吉森, 1995; Greenberg, 1980）。つまり、被援助によって他者の好意を受容した際に経験するネガティブな心理状態のことといえる。一方、援助成果は、自己犠牲を要する行為にさえ喜びや満足を感じるポジティブな心理状態のことである。したがって、援助授与をポジティブな方向で理解する援助成果志向性の高い人は、他者から受けた援助を重荷に感じにくいと予想される。

なお、本研究の概念モデルは Figure 1 のとおりである。

方 法

被調査者と手続き

被調査者は、兵庫県内の高齢者大学を受講中の高齢者587名である。2002年10月末から11月初旬にかけて、高齢者大学の教職員の協力のもとで、質問紙法による調査を実施した²⁾。具体的には、高齢者大学教職員を経由して調査票を配布し、被調査者が自宅等で回答した調査票を後日回収してもらい、回収された調査票を筆者の自宅に郵送してもらう形式で実施した。なお、この調査は、高い回収率を確保するために、図書券500円分の謝礼を準備し、調査票配布時に、配布を担当した高齢者大学教職員が、被調査者に手渡した。その結果、477名から回答が得られ（回収率：81.3%）、回答に不備がある6名を除く471名を分析対象とした。回答者の平均年齢（括弧内は標準偏差）は、67.8歳（ $SD=5.0$ ）で、性別の内訳は、男性が52.2%（246名）、女性が47.1%（222名）、性別不明が0.6%（3名）であった。

質問紙構成³⁾

(1) 援助成果志向性の測定

測定尺度は、高木・妹尾（2001）や妹尾（2002）を参考に、「他者を援助したことをどの程度自分の喜びや満足感として感じられるか」、「向社会的行動に価値を見出しているか」、「援助成果に関する過去の援助経験が自分の中で生きているか」、「援助成果を得たいと動機づけられているか」などの側面を含む29項目で作成し、「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）までの5段階で評定させ、得点が高いほど援助成果志向性が高くなるよう配点した。

(2) 援助後の心理的反応の測定

現在最も力を入れている援助行動を1つあげてもらい、その行動後の心理的反応を表す11項目について、「あてはまる」(5点)から「あてはまらない」(1点)までの5段階で評定してもらい、得点が高いほど、それぞれの心理的反応を経験しているように配点した。援助後の心理的反応は、妹尾・高木(2004)によって、相手にも自分にも援助授与がポジティブな効果をもたらしたとの「ポジティブ効果感」、相手にも自分にも援助授与がネガティブな結果をまねいたとの「ネガティブ効果感」、および、援助授与で自分自身が得るものがあったとの「ポジティブ成果感」の3下位尺度で構成されることが明らかとなっている。本研究では、この結果に基づいて、それらの下位尺度ごとに、項目の評定値を合計して尺度得点とし、分析に用いた。

(3) 援助や被援助への動機づけの測定

前者は「困っている人がいたら、助けてあげたい」で、後者は「自分が困ったら、誰かに助けてもらいたい」で測定し、「非常にあてはまる」(5点)から「全くあてはまらない」(1点)までの5段階で評定させ、得点が高いほど、それぞれ動機づけが高くなるよう配点した。

(4) 援助行動と被援助行動の測定

西川(1997)の日常生活における援助行動項目を松井・西川(2001)が高齢者向けに改訂した援助行動項目の中から26項目を選定し、妹尾・高木(2002)が明らかにした、高齢者における援助行動の構造⁴⁾に基づき、5つの各因子に高く負荷する、“健康を気遣っての電話”、“買い物の代行”、“講演会などの行事案内の通知”、“目的地への車での送迎”、“病院への同行”などの13項目を選定し、最近3ヶ月間のそれらの授与経験と受容経験の有無をたずね、“経験あり”を1点、“経験無し”を0点として、授与経験を単純加算したものを援助行動得点($\alpha = .62$)と、受容経験を単純加算したものを被援助行動得点($\alpha = .65$)とした。

(5) 情緒的共感性の測定

「何を見ても心が動かされる」、「自分のことを、心優しい人間だと思う」などのDavis(1983)の多次元的共感性測定尺度の下位尺度の邦訳版(大淵, 1991)の7項目を用いた。そして、各項目の内容について、「あてはまる」(5点)から「あてはまらない」(1点)までの5段階で評定させ、得点が高いほど、情緒的共感性が高くなるよう配点した。

(6) 視点取得の測定

「どのような問題にも必ず賛成と反対の立場があるので、私はその両方を見るようにして

いる」、「人から嫌な思いをさせられた時でも、つとめて“その人の立場に立って”みようとする」などのDavis (1983) の多次元共感測定尺度の下位尺度の邦訳版（大淵，1991）の7項目を用いた。そして、各項目の内容について、「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）までの5段階で評定させ、得点が高いほど、視点取得が高くなるよう配点した。

(7) 対人態度の積極性の測定

「人と触れ合うことが好きである」、「人付き合いの機会があれば、喜んで参加する」などの本研究のために独自に作成した6項目を用いた。そして、各項目の内容について、「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）までの5段階で評定させ、得点が高いほど、対人態度が積極的であるように配点した。

(8) 心理的負債感の測定

「私は人に何か物をもらうと、お返しのが気になる」、「人におごってもらうと、次は私がおごらなければならないと思う」などの相川・吉森（1995）の心理的負債感尺度の18項目を用いた。そして、各項目の内容について、「あてはまる」（5点）から「あてはまらない」（1点）までの5段階で評定させ、得点が高いほど、心理的負債感が高くなるよう配点した。

結 果

援助成果志向性尺度の分析

尺度項目の基礎統計量

援助成果志向性尺度の各項目の評定平均値と標準偏差を、Table 1 に示した。

Table 1 から、援助成果志向性の中で特に平均値の高い3項目は、「私は人に喜ばれると嬉しい」、「もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる」、「人への行為や援助から、私は喜びや感動を経験することがある」であった。逆に、平均値の最も低い項目は、「私は自分に負担がかかってまで、人のために何かをしようとは思わない（逆転項目）」であった。

尺度構造の分析

援助成果志向性の構造を明らかにするために、援助成果志向性尺度の29項目について、主因子法、プロマックス回転で因子分析を行った。共通性の低い項目や明確な負荷を示さない項目（項目番号2、3、4、9、16、18、20、21、22、28、29）を除いて、18項目で再度因子分析を行い、抽出された2因子で下位尺度を構成した。その結果をTable 2 に示

Table 1 援助成果志向性尺度項目の平均値と標準偏差

項目	N	M	SD
1) 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	456	4.50	.63
2) 人に何かしてあげると、私自身が成長できる。	454	4.20	.79
3) 私は、人に親切にしたり援助することがきっかけで、人間関係は広がると思う。	456	4.49	.67
4) 私が苦勞しても相手の役に立てるなら、私は満足だ。	458	4.30	.77
5) もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる。	454	4.61	.57
6) 私は人に喜ばれると嬉しい。	453	4.64	.55
7) 人に何かしてあげると、私は自分が人の役に立てたと感じる。	457	4.21	.78
8) 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	457	4.12	.79
9) 人と協力することに、私は喜びを感じる。	455	4.37	.66
10) 私は、たとえ知らない人同士でも、思いやり行動を介した人間的触れ合いはのぞめると思う。	457	4.33	.67
11) 人から感謝されると、私は奮起する。	456	4.03	.82
12) 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	453	4.17	.78
13) 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	453	3.89	.87
14) 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	450	3.79	.96
15) 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係維持に寄与すると思う。	457	4.19	.77
16) 人に必要とされていると実感できたら、私は自信がつく。	457	4.32	.73
17) 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	455	3.86	.85
18) 私は人に親切にしたり援助することが楽しい。	455	4.02	.83
19) 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	453	4.00	.83
20) ★人を助けたことで、私が普段接している人への対応の仕方が好ましい方向に変わることはない。	450	2.87	1.10
21) 人に何かしてあげることに、私はやりがいを感じる。	454	3.97	.83
22) ★人を助けても、私自身が特に何か得るということはない。	442	2.99	1.21
23) 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	456	4.23	.70
24) 私は人に喜ばれるのが好きだ。	456	4.27	.76
25) 私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う。	457	4.39	.67
26) 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	456	4.21	.76
27) 私は人に何かをしてもらうより、自分が何かをしてあげることの方が嬉しい。	457	4.37	.69
28) 私は相手に喜ばれたい気持ちで行動すれば、人間関係は円滑になると思う。	454	3.77	1.10
29) ★私は自分に負担がかかってまで、人のために何かしようとは思わない。	454	3.46	1.09

注1) ★は逆転項目

した。

まず、第I因子に高い正の負荷を示した項目は、「援助をすると、私自身を高める目標が生まれる」、「援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる」、「人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う」、「人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である」、「人に何かしてあげると、私は気持ちの充足が得られる」などの項目であり、これらは自己の内面の向上や成長に関する点で共通しているので、「自己成

Table 2 援助成果志向性の因子分析結果（N=430）

項目	F I	F II
13) 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	.95	-.12
17) 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	.82	-.04
8) 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	.75	-.01
14) 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	.73	.05
12) 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	.73	.08
11) 人から感謝されると、私は奮起する。	.72	.05
7) 人に何かしてあげると、私は自分が人の役に立てたと感じる。	.68	.05
19) 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	.61	.18
15) 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係維持に寄与すると思う。	.60	.13
25) 私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う。	-.09	.77
27) 私は人に何かをしてもらうより、自分が何かをしてあげることの方が嬉しい。	-.01	.66
24) 私は人に喜ばれるのが好きだ。	.07	.66
26) 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	.00	.65
1) 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	.00	.63
6) 私は人に喜ばれると嬉しい。	.15	.59
5) もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる。	.15	.57
23) 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	.02	.56
10) 私は、たとえ知らない人同士でも、思いやり行動を介した人間的触れ合いはのぞめると思う。	.17	.53
因子間相関		.78**

注1) ** $p < .01$

長志向」と命名した（9項目、 $\alpha = .92$ ）。

第Ⅱ因子に高い正の負荷を示した項目は、「私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う」、「私は人に何かをしてもらうより、自分が何かをしてあげることの方が嬉しい」、「私は人に喜ばれるのが好きだ」、「私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる」、「人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある」などの項目であり、これらは他者の喜びを自分の喜びとするなどの他者との温かみのある関わりの側面を反映しているので、「幸福・安寧感共有志向」と命名した（9項目、 $\alpha = .87$ ）。

このように、援助成果志向性は、援助を通じて自己を向上・成長させる次元と、他者との質の高い関わりをもたせる次元とで構成されることが明らかとなった。

その他の尺度の検討と基礎統計量

(5)~(8)の各尺度の項目について、GP分析および α 係数と相関係数による項目選択を行

Table 3 援助成果志向性と諸変数の相関関係

	<i>a</i>	自己成長志向	N	幸福・安寧感共有志向
ポジティブ効果感 (5)	.74	.35**	371	.40**
ネガティブ効果感 (3)	.81	-.04	392	-.17**
ポジティブ成果感 (3)	.79	.27**	388	.42**
援助の動機づけ (1)	-	.27**	434	.37**
被援助の動機づけ (1)	-	.12**	434	.19**
援助行動 (13)	.62	.11*	437	.22**
被援助行動 (13)	.65	.08	437	.15**
情緒的共感性 (7)	.75	.48**	406	.54**
視点取得 (5)	.78	.31**	428	.45**
対人態度の積極性 (6)	.81	.46**	428	.57**
心理的負債感 (18)	.85	.40**	405	.42**

注1) () 内は項目数

注2) F I 「自己成長志向」、F II 「幸福・安寧感共有志向」

注3) ** $p < .01$ 、* $p < .05$

った。この結果に基づき、以後の分析に用いた諸変数それぞれの α 係数と、援助成果志向性の下位尺度それぞれとの相関関係を Table 3 に示した。

援助成果志向性と援助後の心理的反応との関連

援助成果志向性と援助後の心理的反応の間の関連性をみるために、それぞれの下位尺度間で相関係数を算出した。その結果、自己成長志向と幸福・安寧感共有志向は、ともに、ポジティブ効果感、ポジティブ成果感と正に関連し、幸福・安寧感共有志向は、ネガティブ効果感と負に関連することが認められた (Table 3)。

つまり、援助成果志向性が高い人ほど、他者援助を通じて、相手も自分も得るものがあったと肯定的な心理的效果を得やすく、逆に、幸福・安寧感共有志向の高い人ほど、他者援助を通じて、行動が相手にとっても自分にとってもコストを伴う行動であったと捉える否定的な心理的效果を得にくいことが明らかとなった。

援助成果志向性と援助や被援助の動機づけとの関連

援助成果志向性のそれぞれと援助への動機づけおよび被援助への動機づけとの間に正の関連が認められた (Table 3)。

つまり、援助成果志向性が高い人ほど、援助や被援助への動機づけが高いことが明らかとなった。

援助成果志向性と援助行動や被援助行動との関連

その結果、自己成長志向と幸福・安寧感共有志向は、ともに、援助行動と正に関連し、幸福・安寧感共有志向は、被援助行動と正に関連することが認められた（Table 3）

つまり、援助成果志向性の高い人ほど、日常生活において援助を多様に経験し、幸福・安寧感共有志向の高い人ほど、被援助を多様に経験していることが明らかとなった（Table 3）。

援助成果志向性とその他の尺度との関連

援助成果志向性の自己成長志向と幸福・安寧感共有志向は、ともに、情緒的共感性、視点取得、および、対人態度の積極性と予想通り正に関連することが認められた（Table 3）。したがって、援助成果志向性尺度の妥当性は確認できたと考える。

しかし、予想とは異なり、心理的負債感との間に正の関連が認められた。

考 察

本研究は、援助に関する行動の「好循環」を規定する内的要因として、援助成果志向性に着目し、それを測定するために29項目からなる援助成果志向性尺度を構成し、高齢者大学生471名に適用して得た評定データを因子分析して援助成果志向性の構造を解明し、援助後の心理的反応との関連性から援助成果志向性の妥当性を検討した。

まず、援助成果志向性は、2因子からなることが示された。なお、因子分析で得られた2つの援助成果志向性とは、人を助ける行動が生活の中で自己を成長させると位置づけ、人を助けることを通じて自己が新たな目標に向かおうと活性化される「自己成長志向」と、思いやりの心を介したやりとりを通じて人と人は心を通わせることが出来るとし、他者の幸福が自らの喜びとして感じられる「幸福・安寧感共有志向」とであることが示された。

つづいて、援助成果志向性の妥当性については、以下のように、4つの視点から検討した。

第一に、援助成果志向性と援助後の心理的反応との関連性を検討した。その結果、一部を除き、予想通り、ポジティブ効果感とポジティブ成果感といったポジティブな心理的効果と正に相関することが、逆に、ネガティブ効果感とは負に相関することが認められた。

第二に、援助成果志向性と援助に対する態度との関連性を検討した。その結果、予想通り、援助や被援助に対する肯定的な態度と正に相関することが認められた。

第三に、援助成果志向性と援助行動経験度との関連性を検討した。その結果、予想通り、

援助行動や被援助行動の経験度と正に相関することが認められた。

第四に、援助成果志向性と援助行動との関連性が指摘されてきた内的要因との関連を検討した。その結果、一部を除き、予想通り、情緒的共感性、視点取得と正に相関することが認められた。また、予測とは異なるが、心理的負債感と正に相関することが認められた。さらに、予想通り、積極的な対人態度と正に相関することが認められた。

以上の分析結果から、援助成果志向性は、他者や自らに及ぶ援助の結果を一層ポジティブに受け止める傾性を示すことが明らかとなった。本研究のほかにも、妹尾・高木（2003）は、援助成果が援助行動を動機づけることを明らかにしている。したがって、援助成果志向性は、援助と被援助の好循環に対してポジティブな影響を及ぼす内的要因と考えることができよう。しかし、援助や被援助との関連の程度を比較すると、援助成果志向性は、援助と一層強く関連することから、援助を規定する内的要因であることが示唆された。

つぎに、本研究で検討した内的要因、すなわち、情緒的共感性、視点取得、対人態度の積極性、および心理的負債感と援助成果志向性の関連性を検討する。

まず、本研究で検討した情緒的共感性と視点取得は、Davis（1983）の多次元的共感性測定尺度の下位尺度である。共感性は、元来、援助行動と正に相関するパーソナリティ特性とされている。援助成果志向性は、他者の幸福・安寧に資する行動を行った時の援助者自身の喜びの感じやすさのことであり、言い換えれば、他者の喜びを自分の喜びとして感じられるかどうかの個人特性である。予想通り、他者の情動に関心を寄せる情緒的共感性や他者の立場に立って考える視点取得の高い人ほど、援助成果が得られやすいことが明らかとなり、予測は支持された。また、援助経験という観点からは、援助経験の豊富な人ほど、援助成果を経験する機会が豊富であると推察され、情緒的共感性の高い人や視点取得の高い人ほど、援助行動経験が豊富で、かつ、成功的であったために、援助成果志向性が高いと考えられる。

対人態度の積極性とは、人と関わりを持つことへの関心の高さや積極性を意味する。高木・妹尾（2002）は、高齢者が日常的に行う援助行動が、ボランティア経験をもつ高齢者ともたない高齢者とで異なり、ボランティア活動経験者は、未経験者よりも、身近な人間関係における援助行動の授与、要請、受容の各タイプに、多様に、積極的に関わっていることを明らかにした。そして、ボランティア活動は、一義的には、他者に恩恵を与える行動であるが、高齢者自身にとっては外出を伴う喜ばしい社会参加活動であり、そのような社会参加活動への肯定的な態度が、地域社会における援助を軸とした人間関係にも肯定的に影響すると考えられた。分析の結果、援助成果志向性と対人態度の積極性とは正に関連

することが認められた。つまり、対人態度の積極性が、自らが必要なときには臆することなく他者に支援を求め、他者からの好意をありがたく受容し、逆に、他者に恩恵を与える行動も進んで行くといった援助と被援助の好循環に寄与することが示唆された。

心理的負債は、被援助をネガティブ（重荷）に感じる状態であることから、援助成果志向性とは負に相関することが予想された。しかし、正に関連することが明らかとなった。この心理的負債も援助を通じた援助成果も、ともに、援助や被援助後の相手の心情を慮ることで経験するネガティブ、あるいは、ポジティブな心理状態である。つまり、援助者として、被援助者として、相手が置かれている立場や相手に及ぶ行動結果を推察し、その結果を読み取る感受性が必要である点で両者は共通しているため、心理的負債と援助成果志向性は正に関連したと考えられる。

以上の結果から、援助成果志向性が援助に関する行動の「好循環」を規定すると考えることがほぼ妥当であることが示唆された。また、援助成果志向性を構成する自己成長志向と幸福・安寧感共有志向との2つの下位志向性は正に相関するが、それぞれが援助行動経験後のネガティブな心理的反応や被援助行動の多様性に及ぼす影響が、部分的に異なることが示された。しかしながら、援助成果志向性の機能は、本研究だけで十分検討できたとはいえず、さらなる詳細な分析が必要と考える。

今後は、援助成果志向性の側面や水準の違いで、援助行動経験の効果がいかに異なるか、内的要因と状況要因とのダイナミックな関連性の詳細を検討し、援助行動や被援助行動の好循環に及ぼす影響を解明していく必要がある。また、援助経験という観点から、援助経験の乏しい若者と援助経験の豊かな高齢者を比較して、援助成果志向性の働きの精緻化に努めることが課題となろう。

注釈

- 1) 妹尾（2001）は、援助成果を“向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬”と定義し、その具体的内容は、援助者が援助行動後に得る満足感や喜びといった肯定的感情や自己価値観といった好ましい認識としている。
- 2) 調査票では、後日実施を予定した聞き取り調査への協力を呼びかけており、協力してもよいとする回答者には記名（氏名と連絡先）を求めたが、自由意思からのものであり、そのことによる回答への影響はないと考える。
- 3) これら以外にも調査項目は存在するが、今回の分析には使用しなかったので省略した。
- 4) 高齢者用援助行動尺度は、“精神的配慮”、“家事代行”、“社会参加の機会提供”、“移動”、“役割”の5因子からなり、これらの因子に高く負荷する項目を選択した。

引用文献

- 相川充・吉森謙 1995 心理的負債感尺度の作成の試み, 社会心理学研究, 11, 63-72.
- Davis, M. H. 1983 Measuring Individual Differences in Empathy: Evidence for a Multidimensional Approach, *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Greenberg, M. S. 1980 A theory of indebtedness. In k. J. Gergen, M. S. Greenberg & R. H. Willis (Eds.), *Social exchange: advances in theory and research* (pp.3-26). New York: Plenum Press.
- Latane, B., & Darley, J. M. 1970 *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton-Century-Crofts. (竹村研一・杉崎和子 (訳) 1977 冷淡な傍観者 — 思いやりの社会心理学 プレーン出版).
- 松井豊・西川正之 2001 IV近隣における高齢者への援助 人間・社会関係問題研究班著 人間・社会関係のダイナミクス — ミクロからマクロまでの多角的分析 —, 125-164. 関西大学政治・経済研究所.
- 西川正之 1997 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究, 13, 13-22.
- 妹尾香織 2001 援助行動における援助者の心理的效果 — 研究の社会的背景と理論的枠組み — 関西大学大学院人間科学, 55, 181-194.
- 妹尾香織 2002 援助成果の生起メカニズムに関する一考察 — パソコン教室ボランティアの事例的分析から — 関西大学大学院人間科学, 56, 123-137.
- 妹尾香織・高木修 2002a 援助行動の構造とそれらが及ぼす心理的效果 — 高齢者の助け合いに関する調査から (1) — 日本心理学会第66回大会発表論文集, 108.
- 妹尾香織・高木修 (2003) 援助行動経験が演じ者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究 第18巻第2号, 106-118.
- 妹尾香織・高木修 (2004) 高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連 心理学研究 第75巻第5号, 428-434.
- 高木修 (1998) 人を助ける心: 援助行動の社会心理学 セレクション社会心理学7 サイエンス社
- 高木修・妹尾香織 (2001) 現実場面における援助効果、援助成果の検証 — パソコン教室を事例としたフィールドワーク — 関西大学『社会学部紀要』, 33巻1号, 59-86.
- 高木修・妹尾香織 (2002) 高齢者による援助行動の実態とその効用に関する研究 (1) — 近隣社会における援助授受の実態と性別、年齢、ボランティア経験による差異 — 関西大学『社会学部紀要』34巻1号, 143-183.
- 高木修・妹尾香織 (2006) 援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性 — 行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究 — 関西大学『社会学部紀要』34巻1号, 143-183.

—2010. 11. 1 受稿—